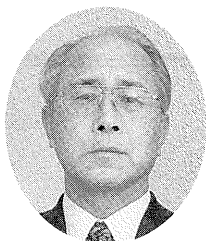


巻頭言



除草剤の剤型選択

(財)日本植物調節剤研究協会 東北支部長 荻原武雄

水田除草剤は、つい最近まで3 kg 粒剤が一般的に使われていたが、今や1 kg 粒剤、フロアブル剤、ジャンボ剤や顆粒水和剤と夢のような話であった薬剤が実用化され、平成18年には、全国でジャンボ剤だけで33万 ha 以上の水田で使用されている。それぞれの剤型に特徴があり、稲作農家はどのような判断で薬剤ごとの剤型を選んでいるのだろうか。

昨年秋、東北各県の水田除草剤に関わっている普及指導員の方々に、剤型選択についてのアンケート調査をさせていただいた。

それによると、東北全体で1 kg 粒剤が最も多く使用されているが、北東北ではジャンボ剤、南東北ではフロアブル剤が増加するとの回答が多い。全体にジャンボ剤・フロアブル剤の使用割合は高くないが、県によって、また、各地域の営農形態によっても剤型ごとの使用割合が大きく異なっており特色が出ていることが分かった。

果樹や大規模畑作地帯ではフロアブル剤が使い易いとの理由から多く使用され、水稲単作地帯では1 kg 粒剤の使用が多い。

顆粒水和剤は普及割合が低く、地域によってよく知られていないようであり、ポジティブリスト制度に対応して、剤型選択変更を指導した地域はごく一部であった。

農業生産者は、経営の主たる作物には現状で大きな課題がない限り新しい技術の導入は極めて慎重になる。

新しい技術を提供する側の価値判断と受ける側とは常に一致する訳ではないが、農業生産者が十分に剤型の内容を知らないままに正しい選択ができない場合や、特性を生かす使用法が行われなかったために評価が劣る結果になること

は互いに残念なことである。

稲作が主体か補完作物か。農業専業か兼業か、土日百姓か、誰が薬剤散布するのか。圃場整備は行われたか、圃場区画の大小は、畦畔や農道の整備は。主要雑草は何か、SU抵抗性雑草はあるのか。薬剤散布は田植え同時か、田植え後何日か。何日水深を保てるか、表層剥離は多いか少ないか。販売はJAか、減農薬栽培米か。薬剤購入はどこからで、薬剤の値段は、等々農業生産者は頭を巡らす。

化学肥料が普通化成から高度化成に変わるとき、研究者や技術者の一部で高度化成は施肥ムラが生じるとの理由から、高度化成普及に消極的であったが、農業生産者は40kg 袋から20kg 袋肥料への利便性と作業性の良さから、瞬く間に高度化成が定着した事例を経験したことがある。

農業生産者は自分の経営や栽培技術全体を総合的に判断し、多少のリスクを覚悟して導入すべき技術や作業法を選択している。

先の調査では、顆粒水和剤は使用に面倒さはあるが、使用後に包装資材等の廃棄物処理が容易で、環境に優しい剤型であると農業生産者からの評価が高い。

ペットボトルが飲料容器として定着する一方、その空容器の処理が社会問題化している。この予測できる問題をペットボトル導入の際、どのような検討をし対応策を考え導入したのであろうか。

今後は、技術を提供する側、使用する側の価値判断だけではなく、そこから発生するであろう様々な状況までが評価と選択の対象となってくる。